

海外流出の日本文献及び日本文学教育 の実情調査並びに西欧の俳句事情視察

— 報 告 —

松 尾 靖 秋

A Report of Japanese Literature Abroad

Yasuaki Matsuo

頭書の目的のために私は本年7月10日から8月30日まで、主としてドイツ、ついでイギリス、オランダなどの大学図書館並びに国立図書館を訪問し、自分なりの成果があったと思われるので、以下その内容について簡略に報告する。

まず大英図書館については、これまでも数回調査の機会があり、和書についてはその大要はほぼつかみ得ているが、今回は特にアーネスト・サトウ (Ernest Satow) の旧蔵書に対象をしばって調査した。サトウはイギリスの高名な外交官で、日本名を佐藤愛之助といい、また薩道と号した。文久2年(1862)到北京を経て、イギリス領事館員として来日し、幕末の日英外交に多大の貢献をしたとされているが、維新後はいったん帰国し、明治28年(1895)駐日公使として再び来日、日本の歴史、文学、語学などに深い理解をもつ人物で、駐日中に収集した文献は、たとえば歴大なシーボルト・コレクションには及ばないとしても非常に多く、一部はケムブリッジ大学に蔵され、他は大英図書館の所蔵に帰している。今回は特に次の点について報告する必要がある。まず天和3年版の「恋の歌かがみ」は、万葉、古今、その他からすぐれた恋愛歌を抄出し集めたものであるが、日本の近世初頭の啓蒙時代を象徴する書物としての意味をもつものといえる。マイクロフィルムが筆者の手許にまだ到着しないので出典その他の詳細な検討は今後にまたねばならない。しかし本書は既に日本には存在せず、従って「国書総目録」にも記載がない。文字通り世界の稀覯本に属する。貞享三年版の「好色五人女」、同年版の「好色伊勢物語」も、わが国では既に稀覯書とされるものであり、また江戸版「好色一代男」についてはさきにレーン教授の報告があるが、それによれば、既に散逸したサトウの旧蔵書の中からパリで偶然発見され、大英図書館の所蔵に帰したものだという。数奇な運命をもつ書物である。サトウの旧蔵書

にはいずれも「薩道」の角印が捺されていてその手沢を偲ばせるものがある。ロンドンに滞在中の数日を利用して私は、イギリスの自然詩人と称される ワーズワースが住み、かつその詩囊をこやしたといわれるイギリス北部のいわゆる 湖沼地帯 (Lake district) を訪ねた。それはわが国の自然詩人といわれるかの芭蕉の自然に対する態度と、ワーズワースのそれとの対比をしてみたいと考えたからである。日本の詩歌には伝統的に自然詩としての性格、即ち自然諷詠が多いといわれる。平安時代の歌語にしばしば見られる「托物陳思」、即ち自然という対象を通してわが心を歌うという態度である。赤人のような自然の美を歌うというのとは別に、例えば「古今集」の大江千里の歌「月みれば千々に物こそ悲しけれ我身一つの秋にはあらねど」などのように、自身の心が悲愁に閉ざされているので、月が悲しく見えるというようなものが存する。心が躍動するような喜びにみちていれば、月は悲しくは映らないであろう。即ち月はわが心を映す鏡なのである。こうしたことは一つのパターンとなって伝統を形成し、わが国には存在する。月や霧や霞は悲しみの対象として歌われることが多いようである。芭蕉の場合もその伝統にのったものであると思われる。

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮
この道や行く人なしに秋の暮

などは単なる自然描写ではなく、芭蕉の心の反映なのであろう。これに対して西欧人には自然の美を讃えるという態度が強いように思われる。例えばワーズワースの有名な詩「水仙」には次のように見える。

谷また丘のうえ高く漂う雲のごと
われひとりさ迷い行けば
折しも見出でたる一群の
黄金色に輝く水仙の花
湖のほとり、木立の下に
微風に翻えりつつ、はた躍りつつ

(田部重治訳)

対象を主観的に見るといわれるわれわれと、客観的に見るという西欧人との相違であらう。かつて和辻哲郎は「自然を内に見るのと外に見るとの相違」といったが、そ

ういうことになる。以上が私の従来の持論であった。私がワーズワースの遺跡を探訪したのは、実はそれをこの目で確かめたかったからである。しかしその後西ドイツのチュービンゲン大学の日本学科の大学院生を対象として俳句の性格について講演をした際、その後の質疑で、院生の一人エミー・シンチンゲル嬢（元学習大学ドイツ文学教授シンチンゲル氏のお嬢さん）から、西欧にも托物陳思の発想の様式のあることを教えられ、大いに得るところがあった。

シンチンゲルさんによれば次のような話であった。詩人ナイトハルト・フォン・ロイエンタール (Neidhart von Reuenthal) (1180-1240) は宮廷内の愛の詩の新しい形式を作り出した。つまりそうした詩を騎士の世界から舞台を農村へと移した。彼の愛の詩は夏の詩 (Sommer lieder) と冬の詩 (Winter lieder) に分かれ、夏の詩の1節目は常に夏の自然描写であり、2節目にその歌の主人公（大抵は恋愛中の男性、それは必ずしもその当人ではなくフィクションである場合が多い。）の心がちょうどその自然の通りだという意味で、心理描写が始まる。従って夏の詩は幸福な愛の詩であり、冬の詩は冬の自然描写から始まり、2節目から心理描写が始まり、この方は悲しい不幸な恋の詩である。彼は非常に多くの夏と冬の詩を創作したがいずれもパターンは同じである。これが彼女の説であった。しかし考えてみると日本の托物陳思的な方法とはやや相違するようである。

次にミュンヘンの国立図書館について述べる。同図書館所蔵の上田秋成書き入れ本「古今和歌集」についてはかつて報告をしたし、また新聞や雑誌にも発表したことがあるので、国文学界ではかなり知られるようになったが、前回私の訪れたときは、折からオリエント関係文献の展覧中で、ガラスケースを通してしか見ることはできなかった。その後マイクロフィルムの送付を得て検討することはできたが、本文中に処々朱書されている部分はフィルムでは明瞭ではなく、その判読に困難したことであった。今回原本によってつぶさに検討することができたのは大きな収穫であった。ここ

にも秋成の「古今集」への容易ならぬ執念のようなものが感じられて、まことに興深いものがあつた。彼の「古今集」への傾倒は紀貫之という人間そのものへの敬愛の念の顕れのようにでもある。同図書館には他にも「ぎやどべかどる」やキリシタン版「天正記」また「は稲生物怪録」「源氏小鏡」、更に世にいうところの嫁入本と思われる豪華な装幀の「源氏物語」（桐箱入）などがある。これには徳川家の紋章が入っているものでいずれかの徳川の関係者のものであつたのであろう。姫のお興入れのさまが偲ばれてほほえましいものがあつた。どこをどのように流れてこのミュンヘンまで来たものであろうか。その不思議な運命を思わずにはいられなかった。余談にわたる

が、ミュンヘンに滞在中、同地の日独協会主催のもとに国立博物館の小講堂で「俳句、その性格と世界文学における位置」という、大論文にでもなりそうな題目で講演をした。殆どがドイツ人で140人ほど、空席のないほど集まった。講演後の質疑がまた非常に熱心で、中には幼稚な質問もあったが彼等のハイクに対する関心の深さを推測することができた。会長のギュンター・クリンゲ氏 (Günter Klinge) は製薬会社の社長で世界中を東奔西走する身であるが、毎日3句を作ることにしているといい、句集も既に5、6冊はあり、日本でも3冊が翻訳されているという高名なドイツの俳人である。私は西欧人のいわゆるハイクというのは日本のそれとは本質的に異なり、名称は同じようでも性格の異なる別の詩型式であると考えているが、とにかくアメリカはもとより、ヨーロッパでもその創作が盛んになりつつあることを知ることができた。ついで乍ら同地博物館で最近催された東山魁夷展は大成功であったという。そうした背景もあったのであろう。

更に、一日私はミュンヘン郊外にあるミュンヘン大学医学部附属病院前庭にある水原秋桜子の句碑を訪ねた。

同病院は玄関を入ったところの一隅にある模型と説明によれば7年前に建設され、敷地は50万平方メートル、建築延面積は125,000平方メートル、1,508ベッドで建設費は7億2,500万マルクであったという。世界でも屈指の大病院というべく、13階建ての広大な建物である。句碑のことは受付できいてもなかなか分らなかったが、患者の散策する庭に出てみて、句碑はそれとすぐわかった。ドイツの国内に秋桜子の句碑は23基あるがその中の1つで、秋桜子のかつての東大医学部時代の同窓生で独協医大名誉学長石橋長英氏の奔走によって、すべて石材は日本から運んで建てられたものである。

花の下に病を救ふ手を組まむ

という日独医学の協力をうたった句が刻まれている。

次にはベルリンの国立図書館に移ろう。同図書館では大冊の日本文献目録が既に刊行されている。日本文献の多いことはあまねく知られているところであるが、中でも山崎宗鑑自筆の「犬筑波集」は逸品である。このことは既に報告したのでここでは省略するが、俳諧関係のものは比較的少い。稀覯書としては「伊勢物語絵本」「源氏物語絵本」などの大部のものがある。マイクロフィルムが手許に届いた段階で詳細な検討を加えたいと予定している。ただ図書館で目下進行中の作業は、西ドイツ全土の図

書館に所蔵されている日本文献についての解説つき総目録の編集という大業である。全図書館から現物の送付を受け、1点ずつ検討し解題を施すという大事業で、その後私の訪ねた大学図書館では既に書物の発送準備をしていたところもあったから、これからが大変なことであろうと想像した。主任のクラフト女史 (Dr. Klafft) の話によれば数年後には刊行にこぎつけるとのことであった。

ミュンヘンに滞在中、私は前にもふれたようにチュービンゲン (Tübingen) 大学の日本学科を訪ねた。主任のクラフト教授 (Klafft) は日本の社会学者であるが、文学にも造詣が深く、私は大学院生を対象に俳句についての話を依頼され、ミュンヘンのそれとほぼ同じ内容の話をした。彼等は日本語を充分理解するので、ミュンヘンでの講演とは違った気楽さがあった。

次にはオランダのフロニンゲン大学 (Groningen) に移る。

同大学は日本ではあまり聞きなれない大学であるが、1613年の創立で、大会議室の壁面には歴代の学長の肖像画が百余枚掲げてあったのは壮観というべきで、強い印象を受けた。三百数十年の歴史の重みというものであろう。

この大学の言語学研究所でコンピューターによる俳句の分析作業が行われていることはかつて報告したところであり、日本でもそのことは次第に知られるようになったが、今日ではそのデータベース作製の作業を終り、それをどのように利用するかという段階にきている。そのプリントは日本にも貸し出すことが可能であるとのことであったので、例えば国文学研究資料館などで借り受け、研究テーマに従ってこれを利用することが望ましいと思われる。

次はボン大学について述べる。同大学は早大や国学院大と交換制度を持っており日本でも馴染みの深い大学である。一日同大学に日本学科主任のクライナー教授 (Kleiner) を訪ねた。同氏は民俗学者であるが日本文学にも深い理解を示し、私は日本文化研究所所蔵のトラウツ文庫について詳細な説明を受けた。たまたま立教大学の住谷教授も同席であった。クライナー、住谷両教授はかつてウィーン大学のスラビック教授 (Alexander Slavik) の教えを受けた学友で、目下協力してドイツの農村の研究を進行中とのことであった。

トラウツ (Friedrich M. Trautz) はもともと軍人であったが、第一次大戦で負傷し退役後ベルリン大学に入学して日本学を専攻し、その卒業論文は「五重塔の研究」であったという。来日して昭和7年～18年の間京都のドイツ文化会館の館長を勤めた。来日してからは長崎、高野山や東海道、更には芭蕉に非常な興味をもち、この4つが彼の生涯の研究テーマであり、墓はいま高野山にあるという。文庫の蔵書約400点は

すべて整理されて目録も刊行されているが、彼が1931年から33年にかけて書いた大量の論文やエッセイの原稿は扉つきの大書棚に満ちていて、いまだ手のつけようがないとのことであった。一見したところでは芭蕉や蕨村に関するものが多いようであった。和書のうち特に珍書や稀本はないが、近世のものが圧倒的に多いのは彼の学問の傾向から当然のことであると思われた。同文庫の蔵書の中で、私が特に披見を申し出たのは、「芭蕉庵小文庫」(元禄9年刊)「芭蕉門古人真蹟」(寛政元年刊)「芭蕉翁絵詞伝」(寛政5年刊)「芭蕉翁二十五ヶ条の掟」(写本)「芭蕉翁反古文」(天保8年刊)「芭蕉翁発句集」(刊年不詳)「芭蕉翁終焉記」(元禄7年刊)「芭蕉袖草紙」(文化8年刊)「蕨村集」(文政11年刊)などで、いずれも完全な形で保存されている。

次にフランクフルト大学についてふれておきたい。主任のマイ教授(Ekkehard May)は旅行中で不在であったが、あらかじめ連絡しておいたので、サトウ・ディズナー女史(Dr. Sato Diesner)に種々の教示を受けた。

日本学の学生は70名ほどであるが、この学生は途中で転科する者は殆ど無いとのことであった。前記チュービンゲン大学では当初30人ほどであった学生が4～5年後には一人になったという例もあるところからすれば立派であるが、しかし卒業生の就職にはやはり苦労があるようで、それはドイツの各大学日本学科できいた歎きであった。

ここには日本の版本は多くはないが、研究室には群書類従や小学館の「日本古典文学全集」や「日本近代文学叢書」「新潮現代文学」、角川書店の古典の全注釈本などが揃っており、附属図書館にも「国訳漢文大系」「史料大系」「大神神社資料叢書」など基礎的なものは大抵揃っている。珍らしく思われたのは「源氏物語」や「枕草子」「徒然草」「蜻蛉日記」「平家物語」「今昔物語」などの英、独、仏訳本が揃っていることであった。

最後に、ルール大学日本学科の図書館についてふれる必要がある。同大学は1965年に建設にかかり、翌年私が初めて訪問してのち、数回にわたって訪問したが、その都度整備を重ねていることが明瞭に観取された。いまやドイツの最大規模の大学であるといってよい。日本からの留学生も多く、特に韓国学生の数千人を超え、最も多いという。

戦前ベルリン図書館にあったものが戦後アメリカのワシントン図書館に移り、ソ連によって押収された日本関係図書はいまだ返却されないが、アメリカのものは戦後返却されて一旦マールブルクの図書館に入り、1966年にルール大学の日本学科に移されたものだという。中にはベルリンで爆撃にさらされて損傷を受けた「伊勢物語」もあ

り、この傷あとが傷々しいほどである。稀覯本としては1669年刊のオランダ人医師アルノードス・モンターヌス著「東インド貿易会社のレポート」があり、江戸や大阪などの風景銅版画が珍しい。また1586年刊のラムビオ著「船の旅についてのレポート」があり、マルコポーロの旅行記などを抜粋しているのが興深い。日本関係としては「長明海道記」「狂歌江戸名所図会」などがあるが、すべての書物の扉の処に③という墨印が捺されている。所員の説明によればアメリカから返却された書物にはすべて③がついていて、アメリカではそれほど重要視されなかったという意味のマークである由であった。

更に一言つけ加えると、西ドイツではハイデルベルク大学は創立600年の記念事業の一つとして来年度から日本学科を創設することになっており、ラインラントのトリエル大学 (Trier) も同じく日本学科を創設、チュービンゲン大学では来年度から日本学科学生の増員が決定し、従って教員の充実がはかられる計画であるときいた。ただ前述のように卒業生の就職についてはどの大学でも頭を痛めている問題で、私見では海外進出の日本企業などがいまだ少し積極的にそのような問題に参画すべきではないかと思う。ともかく日本に関する関心の高まりを見せているのは全ドイツに見られる最近の傾向であるといつてよいと思う。

(まつお やすあき 本学教授・日本文学)